



🔥 7月11日(水)

ナーダムの3種競技は、相撲・競馬・弓射。きょうは朝から、そのひとつである競馬を見に出かけた。ツォゴウの母から借りたデールを着て、きょうも正装である。ナーダムの競馬の騎手は子どもだ。会場は市内から車で40分ほどの郊外。日本のような競馬場があるわけではなく、20kmくらい離れたはるか遠くから、草原を一直線にゴール目指して走ってくる。

ツォゴウの父も馬主だ。彼の馬が出場する1回目の出走は朝8時半。迎えの車が遅れて、1回目は見られなかった。2回目まで3時間ほど時間があり、県のマークのついたテントで一休み。ホーショール(羊肉の揚げ餃子)やスーティーツァイ(塩入りミルクティ)をご馳走になった。アイラグ(馬乳酒)も振る舞われる。

11時半出走の2回目の競馬をゴール近くで観戦した。モンゴル人は目が良いのか、遠く彼方のから走ってくるのが見えるようで、私にはまだ何も見えないうちから、もう彼らは浮足立って歓声がある。子どもの競馬だから、それほどでもないと思っていたが、近くで見るとすごい迫力だ。

午後は前日行ったスタジアムに戻り、相撲の決勝戦と表彰式を見た。相撲と弓射の優勝者への賞品はオートバイだ。競馬の優勝者の子どもへの賞品は何だったかわからなかった。

ナーダム最終日の夜は、政府主催(?)のナーダム関係者のパーティに招待された。近隣国から、ホブドのナーダムに参加しているホーミーや馬頭琴演奏者、モンゴル相撲や弓射の優勝者

が招かれた。私たちのテーブルには、キルギスタンからの人もいたので、ロシア語の通訳があった。食事やスピーチやホーミーや馬頭琴演奏や記念品贈呈の後は、ダンスタイム。モンゴル人や近隣のロシア語圏(キルギスタンやカザフスタン等)の人たちが、こんなにもダンス好きとは知らなかった。こちらではパーティにはダンスは付き物のようだ。Mも私も社交ダンスができない。何十年前も前、ゴーゴーやツイストが流行っていたころを思いだして、私は隅っこのほうで、勝手に自己流のステップを踏んでごまかした。座っていると、女性が少ないからか、踊ろうと誘いがかかるのだ。



ナーダムの競馬の騎手は子ども

(7月11日)

🔥 7月12日(木)

ホブドに来てから昨日までの4日間は、連日ナーダム見物を中心に、欲張ったスケジュールで、連日零時頃まで動きまわっていた。きょうは全日フリー。ゆっくり朝寝して、ゆっくり朝食をとり、ドアを開けっ放しにして、洗濯物を外のロープに干していたら、酒瓶を持った男が入ってきた。Mが“ビシビシ”と言って追い出した。“ビシビシ”ってどんな意味か不明。ちょっと不安になって、鍵を持っているツォゴウに電話した。昨夜が遅かったからまだ寝ているのか応答なし。

11時頃になって、「親の会」のバイヤーが来てくれた。侵入者のことを話そうとしても、通訳のツォゴウがいないから、なかなか伝わらない。それはもう良しとし、天気が良いので、Mが片言のモンゴル語を駆使して、「私たちはまちに散歩に行きたい、5時には帰って来る」と伝

えた。ふたりだけの初めての外出。ホブド5日目ともなると、言葉の不自由な私たちでも、何とかなるだろうとバイヤーは思ったのだろう。OKの許可がでた。

実はナーダム初日、こんなことがあった。県庁舎前の広場で、イベントが始まるまでの待ち時間に、私は郵便局に行こうと思った。広場から5分ほど歩いたところに郵便局があることを、事前に地図で確認してあった。Mが郵便局はモンゴル語で「ショーダン」だと教えてくれた。ひとりでも大丈夫なのに、「親の会」の男性がついてきた。「ショーダン、ショーダン」と覚えただけのモンゴル語を繰り返して、その方向を指さすと、彼はニコニコ笑ってうなずいて、先に立って歩きだした。でも方向が違う。角を何回か曲って、結局、広場に戻ってきてしまった。Mがなにやら身振り手振りを交えて説明してくれて、こんどはまっすぐ郵便局へ連れて行ってくれた。

ナーダムあけのまちは閑散としている。レストランも商店も公共施設も休みだ。人も車もほとんど見かけない。牛が2頭、広い道路をゆっくりと横断していった。かれらもきっと散歩中なのだろう。2日前の夜も道路を歩いている牛に出会った。モンゴルにも野良牛がいるのかと、ツォゴウに尋ねると、「どの牛も飼い主がいる、あの牛は夜遊びしているだけだ」とのことだった。

まず、サンギーン・ヘレムに行った。高さ3m、幅1.5mの清朝時代の城壁跡。18世紀中頃に建設され、寺院や家屋や墓がある城壁都市だったようだが、現在は赤土の土塁のみ残っている。

ホブドは市の中心から15分も歩くともう郊外で、住居としてのゲルがまだ残っているが、建て替えがどんどん進んでいるので、この辺りのゲルもいずれ姿を消してしまうのだろう。

ザハ(市場)も商店も郵便局も博物館も食堂

もきょうは休みであることを、歩きまわって確認し、仕方なく初日に食べたボヤントホテルのレストランで遅い昼食をとった。あとは何もすることがなくなったので、センターに戻った。

昼間、まちを歩いて気づいたのだが、道路のマンホールの蓋がないところが、何か所かあった。覗いてみるとかなり深い。落ちたら骨折くらいでは済まないだろう。蓋が閉まっても、そこに足を置かない方がいいと注意された。何年か前にニュースや映画にもなったマンホールチルドレン(モンゴルのストリートチルドレン)のことが頭をよぎった。

モンゴルの冬は、首都UBで零下30℃以下になる。社会主義崩壊後、貧富の差が拡大し、混乱のなかで、住むところのない子どもたちが、マンホールで暖をとり暮らすようになった。Mに訊いてみても、「私は冬にモンゴルに来たことがないから、実際には目にしたことはない。最近耳にしなくなったが、新たな問題も発生しているようだ。地方で暮らす遊牧民が、冷害などの異常気象により、家畜が死んでしまい、生活が困難になって、都市部へ移り住むようになり、都市人口が急増し、社会問題となっている。まちに移り住んだ遊牧民のほとんどが貧困層で、住宅を借りる資金もなく、マンホール暮らしが始まった。マンホールチルドレンから、マンホールファミリー・マンホールアダルト問題に転化しているとか…」このことを、Mの友人や「親の会」の人たちと話題にするチャンスは最後までなかった。

7月13日(金)

ボランティア初日。8:30にはリハビリ担当のサスターナが来所した。彼女はおそらく理学療法士(PT)だと思う。私たちも、そろそろ準備しようと思っていたとき、筒状のものを布にくるんで、紐でぐるぐる縛ったものを抱えた女

性が、私たちの寝室に飛び込んで来て、それをふとんの上に置いた。よく見ると、布の端からチラリと赤ちゃんの顔が覗いている。それを抱えてきた女性(多分赤ちゃんの母親)が、粽のようにぐるぐる巻いた紐を解くと、中から丸裸の赤ちゃんが現れた。生後1か月くらいだろうか。彼女は頻りに私たちに何か訴えているが、通訳のツォゴウはまだ来ていない。もしかして、この母子がきょうの1番目の面談者…!?

そこへ「親の会」のバイヤーがやってきた。この母子は診療室の患者さんだったのだ。内心ホッとす。それにしても、赤ちゃんが“粽巻き”なのはなぜ? Mの話によると、モンゴルでは、赤ちゃんは生後1年くらいまでは布でぐるぐる巻きにして育てるそうだ。昨年1月、日本で生まれたザヤの娘のスンドリもそうだったという。ザヤの母が、娘のお産からしばらくの間、日本に来て孫の世話をしていたから、“粽巻き”だったのだろうか。

9時を過ぎてもツォゴウは現れない。すでに2人の来訪者が待っている。ひとりは肢体不自由の6歳の男子、彼は絨毯敷きの大部屋(プレールーム)で、サスターナとリハビリを始めた。もうひとりは18歳で、今までほとんど学校に通っていなかった女子だ。きょうは祖母が彼女に付き添ってきている。とりあえず私たちはダイニングルームで、彼女と何かすることにした。紙と鉛筆を渡して、名前や年齢を書いたり、折り紙をしたり、それを紙に糊で貼ってもらい、動きを観察した。

そんなことをしているうちに、やっとツォゴウが現れた。彼女を介していろいろ話してみると、18歳のこの少女は、幼少の頃から、ほとんど母親には関わってもらえず、昼間はずっと近くの祖母のところまで過ごしている。家では手伝いらしきこともしていないようだ。自分の名前だけは書けるが、読み書きは難しい。

彼女がこれからやれることは…? 「彼女は四肢には問題はない。簡単な指示は理解できる。ひとつずつ丁寧に時間をかけて、できることを増やしていけば、それが自信にも繋がるはずだ。彼女に今一番必要なのは、“居場所”だろう。毎日休まずここへ通ってくれば、何かできることがあるはずだ」というようなことをMが話した。私も同感だが、日本のように送迎バスがあるわけでないから、通ってくること自体が難しいのかとも思う。

その後は大部屋(プレールーム)に移動して、学齡前の肢体不自由児の、リハビリの様子を見学しながら、保護者の話をきいたりした。足首にどのくらいの重さのウェイトセットをつけたらよいか、スタンディングボックスを使って立たせてもよいものかなど、きょう会ったばかりの子に、助言するのは難しい。

午前中、一人当たり20分~30分ずつ、“面談”した。先方の話をきいたり、こちらから助言したり(それはほとんどMが担当)…。私は傍で専ら面談者の子どもと遊んでいるだけ…。初日面談者6名。

私たちが面談している間に、「親の会」の人たちが昼食の用意をしてくれていた。ダイニングの鍋には、ボーズが湯気をたてていた。中国語の包子(バオズ)が、モンゴル語ではボーズだ。ボーズの具は羊肉だけで野菜は入らない。皮は包子より餃子の皮に近い。膨らみのない蒸し肉まんといったところだ。

午後は“親の会”の人たちが用意してくれた車で、少し郊外の寺院や小高い山の展望台に登って、ホブドのまちを高いところから眺めた。昨日、酒瓶を持って入ってきた男性は、実は「親の会」のメンバーで、きょう車を用意してくれたのも彼だった。本当に失礼なことをしてしまったとお詫びした。

(次号に続く)